

日赤和歌山ルネサンスの変遷

日本赤十字社和歌山医療センター 教育研修推進室

吉田 晃

索引用語：日赤和歌山ルネサンス，コロナ禍，Web 配信

要 旨

2021年3月に第12回日赤和歌山ルネサンスを開催した。本会は「新病院に向けてすべての職員とともに新しい文化を創造しよう」を合言葉に、2009年3月に第1回が開催された。その後、東日本大震災など社会で起こる出来事や、医療制度の変化などに対応した発表や、様々な部署から日常業務と密接に関連した演題、組織横断的活動への取り組みなどが発表された。今回はコロナ禍ではあったが、Web配信を用いて行い、今までと同様に業務の取り組みの報告に加えて、病院の方針や進めている事業の報告、診療部門では新しい治療などの紹介など、ボトムアップとしての役割に加え病院の目指す方向を共有・議論する場とした。

2021年3月4日～11日をルネサンス週間として、初日に「がんセンターの運営」「新型コロナ最前線」を、最終日に「看護学校閉校」の講演とWeb会議システム(Webex)で配信を行った。一般・指定演題は院内イントラネット(MyWeb)で4日～10日に配信し自由に視聴できるようにした。演題数は46題で、全視聴数は2,378視聴であった。視聴賞3題、審査員賞8題(内、優秀賞と最優秀賞各1題)、特別賞1題を選出した。

本会をこのコロナ禍で開催することで、困難な状況の中でも医療の質を高めようという職員・各部署での意識を途切れさせず、さらに各部署での取り組みを理解・共有し、本医療センターとともに進むための貴重な場、文化醸成の源となることを目指した。今後も継続していきたい。

With コロナの時代に病院の新たな文化を育んでいきたい。

はじめに

2020年は新型コロナウイルスにより感染症対策とともに通常診療の維持が主となり、学会活動においても中止やWebでの開催など、従来の集合型では行われず、活気に乏しいものとなった。本医療センターでも原則、講演会の中

止、研修も縮小と、教育研修分野は停滞を余儀なくされた。このような困難な状況の中でも各部署は医療の質を高めようと、様々な取り組みを行ってきた。日赤和歌山ルネサンスは、病院の文化醸成の源であり、各部署での取り組みを理解・共有し、ともに進むための貴重な場であるという位置づけのもと、殆どをWeb配信という形にはなるが2020年度も継続した。

本稿では2021年3月にコロナ禍において開催した第12回日赤和歌山ルネサンスを報告するとともに、過去の本会の変遷をまとめたので、それを今後につなげたい。

(令和3年12月20日受付)(令和4年2月9日受理)
連絡先：(〒640-8558)

和歌山市小松原通四丁目20番地
日本赤十字社和歌山医療センター
教育研修推進室

吉田 晃

経 過

日赤和歌山ルネサンス開催については、「2007年に始まった本館建設工事に伴う駐車場の狭小化や仮設棟での診療など数々の困難な状況の下で、ともすればネガティブ思考に陥りがちな職場を活性化するために『新病院に向けてすべての職員とともに新しい文化を創造しよう』を合言葉に準備を進め、2009年3月に大会長小西裕院長(当時)、実行委員長百井亨副院長(当時)として第1回を開催した。」(第8回大会 会長挨拶より、一部改変)と記載されている。

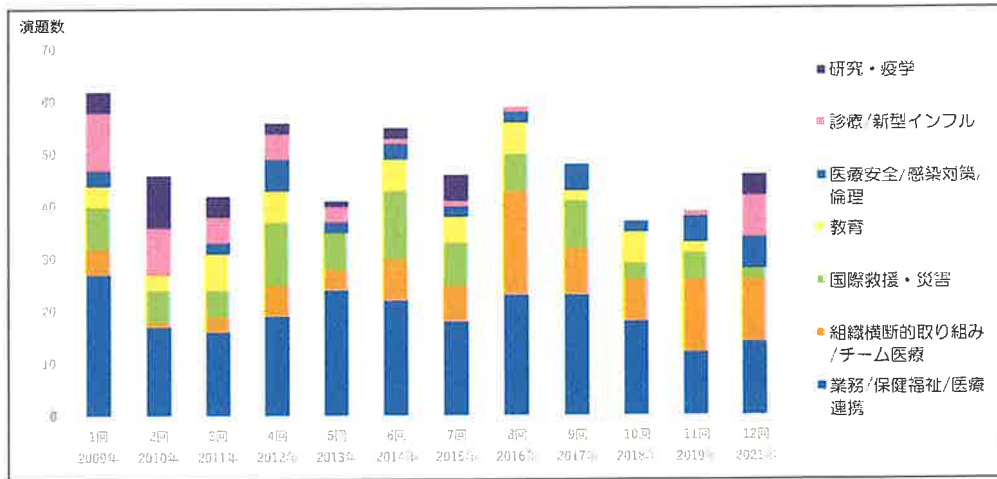
以前は院内集談会を開催していたが、2000年の第28回を最後に自然消滅していた。当時の学術委員長であった筒井一成先生が、これからの時代にマッチした新しい形で再興できないかと考え「医療そのものをテーマにした、すべての職種を巻き込む交流の場としての集談会」として提案し、2008年3月に聖路加国際病院の学術集会「聖ルカ・アカデミア」を百井副院長含む職員9名が見学し、25名で準備委員会を行い、2009年3月20日に第1回日赤和歌山ルネサンスを開催した。

目標は

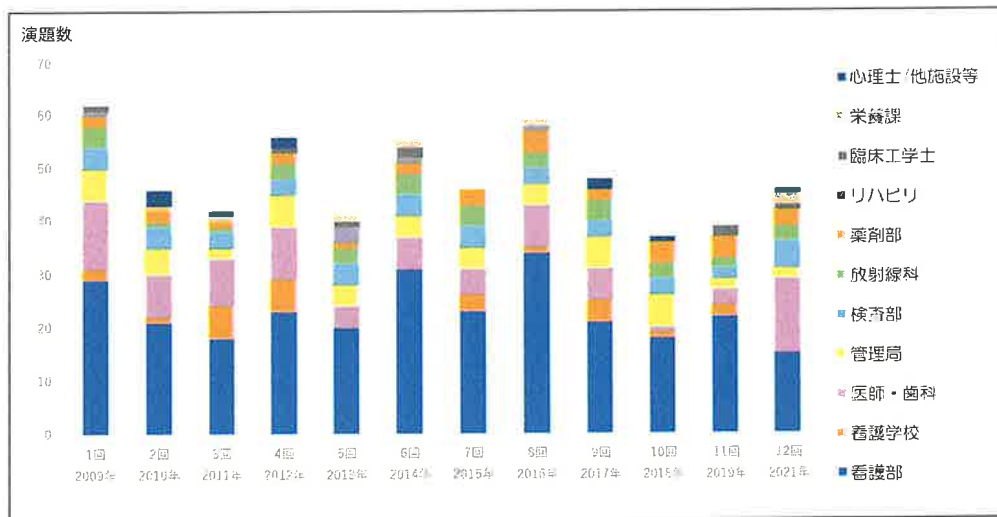
- ① 今まで発表の機会が少なかった部門の人たちも積極的に発表できる場にする
 - ② 個人や部署単位での取り組み・工夫の成果にすべての職員が耳を傾け、院内の課題を共有する
 - ③ 部署や職種間での連携を深めることにより業務改善を推進し質の高い医療を提供するとした。
- 第1回は、一般演題は62題で(図1)、日常業務での取り組みが27演題と最も多く、様々な部署から日常業務と密接に関連した演題が多く発表され、多角的な視点でとらえることで、業務改善や課題解決に有効に機能することが期待された。職種では看護師が29演題、医師が13演題であった(図2)。特別講演は、元院長の吉田修先生の「これからの医療を考

える」であった。

- 2011年(第3回)からは大会長は百井亨前院長が就いた。
- 2011年3月11日には東日本大震災があり(図3)、2012年の本会(第4回)では災害対策の確立に向けた取り組みなどが重要課題となった。
- 2014年(第6回)の演題からは、職域限定の研究の発表に加えて組織横断的活動への取り組み、現場の課題分析を通して先を見据えた取り組みなどの発表が増え(図1)、「経験に対する受け身の考察」から「問題を発掘して収穫し、それによって現状を能動的に変容させる」活動の発表が増えてきた。
- 2015年(第7回)からは本医療センターではBSCを導入し(図3)、日赤和歌山ルネサンスは、BSCを年度ごとに職場横断的に検証する場として「再生」から「飛躍」に向けてその役割を進化させていくものと期待が寄せられた。
- 2017年(第9回)からは大会長は平岡真寛院長となり(図3)、自ら実践したことを客観的に評価し、課題を解決し、改善することがすべての職員に望まれ、職場、職域を超えて議論する場としての役割を求めた。



【図1】日赤和歌山ルネサンスの変遷（分類別演題数）



【図2】日赤和歌山ルネサンスの変遷（職種別演題数）

出来事	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
出来事	新型インフルエンザ		東日本大震災	紀伊半島豪雨		エボラ出血熱		熊本地震		西日本豪雨	令和元年 台風19号	新型コロナウイルス	
院長	小西 裕				百井 亨					平岡 眞寛			
病院沿革	DPC対象		新本館竣工	高度救命救急センター			BSC			緩和ケア病棟	連携拠点病院 (高度型)	地域がん診療	看護学校閉校 がんセンター
演題	中央検血室		ベッドコントロール	DPC		女性医師職場環境	退院支援 緊急コール	病児保育室	総合相談支援センター チーム医療	PFM	救命ワークステーション		緩和ケア病棟

【図3】2009年以降の社会の出来事と病院の沿革、関心の高い演題など

2021年 第12回 日赤和歌山ルネサンス開催

2021年再開するにあたり、開催母体を実行委員会から教育研修推進室に移行し、大会長は院長、実行委員長は教育研修推進室長、副委員長は看護部長と学術委員長とした。

内容としては、今まで同様に各部署あるいは組織横断的な業務の取り組みの報告に加えて、病院の方針や進めている事業の報告、診療部門では新しい治療などの紹介などボトムアップとしての役割に加え病院の目指す方向を共有・議論する場を目指した。指定演題として病院の方針と、研究分野では Clinical Investigator's Program Extension (CLiP：臨床研究遠隔学習プログラム) 修了者の発表、医療の質を高めるため日頃活動を行っているチーム医療の3つとした。

また、発表形式は Web 配信するものとし、職員がいつでも視聴でき、審査もできるように工夫した。また、発表スライドは動画配信システムで保存し、いつでも視聴できるようにした。

研修医の発表は、2020年から全体の発表とは別日程で開催し、業務から隔して全員参加とした(図6)。演題決定、抄録・スライド作成で診療科の指導を受け、科学的根拠に基づき、自論を展開する力を養うことを目標とした。また、発表以外に他の研修医の採点を行い、コメ

ンテーターとして次演者のコメントをも行うことで、積極的に参加し多くの知見を得る機会、学術的に評価する視点を学ぶこととした。

1. 開催曜日、開催様式

- ① 2021年3月4日～11日
- ② ルネサンス週間開催の初日に「がんセンターの運営」「新型コロナ最前線」を、最終日に「看護学校閉校」の講演とWeb会議システム(Webex)で配信を行った。
- ③ 一般演題、指定演題(病院の方針、学術、チーム医療)は1題7分以内とし口演録音を行い院内イントラネット(MyWeb)で4日～10日に配信し自由に視聴できるようにした。
- ④ 視聴数の多い演題を視聴賞3題、審査員賞8題(内、優秀賞と最優秀賞各1題)、特別賞1題を選出した。

2. 結果

- ① 演題数は46題であり、一般演題は24演題、指定演題は22演題(病院の方針5題、学術4題、チーム医療13題)であった。
- ② 発表者は職種別に、看護師15人、医師14人、臨床検査技師5人、薬剤師3人、診療放射線技師3人、事務員2人、管理栄養士2人、歯科衛生士1人、臨床工学技士1人であった。
- ③ 全視聴数は2,378視聴(開会挨拶、講演も含む)であった。



【図6】令和3年1月28・29日 多目的ホールで行われた研修医発表の様子



【図4】和歌山赤十字看護専門学校教室を会場とした第5回日赤和歌山ルネサンスの様子



【図5】抄録集の表紙デザイン（第1回～第12回）

視聴賞（セッション毎の最高視聴3演題）

医療安全 (臨床工学技術課)	山下 繁	医療安全研修会の参加率 100%を目指してーコロナ禍における研修会の開催から今後の開催方式を考える	111 視聴
検査部	山口 京	終夜睡眠ポリグラフ検査のワイヤレス化による業務体制の改善	74 視聴
看護部	芝田 里花	当センターにおける看護師の特定行為研修の現状	56 視聴

特別賞

医療安全 (臨床工学技術課)	山下 繁	医療安全研修会の参加率 100%を目指してーコロナ禍における研修会の開催から今後の開催方式を考える
-------------------	------	---

審査員賞

看護部 (南館9階)	大山 愛	実践に活用できるリーダーシップ研修を目指して	
検査部	水谷 陽介	臨床検査室の認定「ISO 15189」取得活動報告	
検査部	山崎理美子	検体検査室における受入不可検体記録の解析結果 (ISO 15189 における取り組み その2)	
診療科部 (放射線治療科部)	米山 正洋	放射線治療科部のオリゴ転移に対する体幹部定位照射の初期経験	
診療科部 (麻酔科部)	箕西 利之	ハイブリッド手術室の新しい活用への道のり	
医療技術部栄養課	山本 陽子	委託導入後の栄養課(管理栄養士)の業務変更と取り組みについて	
看護部 (本館7階B病棟)	奈良岡由紀	安全な早期離床に向けての取り組み	優秀賞
医療社会事業部	北川 勝巳	緊急一斉メール送信訓練結果の考察と課題	最優秀賞

2. まとめ

本会開催後にアンケートを行った。発表形式では、一般・指定演題の Web 配信での発表に関しては、「いつでも視聴でき、様々な演題を視聴できて良かった」「質疑がなく物足りなかった」「視聴できる PC 端末の数や配信環境が悪かった」などの意見が多かった。Web 配信は、いつでも視聴できるというメリットはあるが、質疑などで得られる熱量が感じられないため、次回からは、Web 配信でいつでも視聴しながら、質疑は集合型で行うスタイルを検討する。

演題では、それぞれが素晴らしい内容で、審査でも優劣はつけにくかった。視聴賞・特別賞を獲得した医療安全推進室の発表は、まさに病院として解決しなければならない「研修会参加率向上を目指した取り組み」の貴重な発表であり、本年度の参加率向上が期待される。検査部は ISO を取得した影響で演題

が多かった。その中で「受入不可検体記録の解析結果」は問題解決に向けた取り組みであり現場で活かされる内容であった。優秀賞は看護部の「安全な早期離床に向けての取り組み」で、診療現場で医療の質向上に向けて大切な試みであり貴重な発表であった。最優秀賞は医療社会事業部の「緊急一斉メール送信訓練結果の考察と課題」であり、和歌山県では災害に備えた取り組みが重要であるが、病院として災害時の人的資源確保という側面から検討した貴重な発表であった。

講演では「がんセンター開設」「新型コロナ最前線」を行い、新型コロナ感染症対策を行いながら高度な医療を進めるといふ、本医療センターの逆境にも負けないパワーと結束力の強さを感じた講演であった。また、「看護学校閉校」に関する講演では、看護学校の歴史、閉校に至った過程などを懐かしい写真を交えた話で、とても感慨の深い講演であった。

今回試みた指定演題では、病院の方針として、「ドクターアシスタント」「看護師の特定行為」「情報通信技術：ICT」を取り上げた。病院の方向性や方針が分かりにくかった職員も、今回の発表で理解が進み共有できたのではないかと思われる。学術では「科研費」「CLiP」を取り上げ、学術的な活動の重要性が確認できたが、実際の研究の発表演題はなかったため、次回に期待したい。また、チーム医療は、医療の質を向上・維持するために重要な役割であり、それぞれのチームの活動を報告してもらい、職員全体が理解し共働していくためにも、毎年発表演題に取り上げていく。

新型コロナウイルス感染症の影響で、各部署で取り組まれている演題が少なかった。次回からは、医療の質の向上を目指し各部署で取り組んでいただき、さらに多く発表されることを期待したい。

まとめ

新型コロナウイルス感染症の影響で、通常診療にも多大な影響が及ぼされ、普段の生活も不自由を余儀なくされた。教育研修分野でも停滞せざるを得なかったが、各部署では困難な状況の中でも医療の質を維持そして高めようと様々な取り組みを行っていた。今回、第12回日赤和歌山ルネサンスをこのコロナ禍で開催することで、職員のその意識を途切れさせず、働く意欲にも繋げ、さらに各部署での取り組みを理解・共有し、本医療センターでともに進むための貴重な場、文化醸成の源となることを目指した。今後は形態が変化しながらでも、文化醸成となる場が提供されることを切に望む。

With コロナの時代に病院の新たな文化を育んでいきたい。

Key words : Japanese Red Cross Wakayama Medical Center Renaissance,
COVID-19 infection epidemic period, Web distribution

Transition of the Japanese Red Cross Wakayama Medical Center Renaissance

Akira Yoshida

Head of Promotion of Education, Skills and Training Office, Japanese Red Cross Wakayama Medical Center

Abstract

The 12th JRC Wakayama Renaissance was held in March 2021. The first meeting was held in March 2009 with the slogan “Let's create a new culture with all staff for the new hospital”. After that, presentations were made in response to social events such as the Great East Japan Earthquake and changes in the medical system, presentations closely related to daily work from various departments, and efforts for cross-organizational activities.

This time it was in a time of COVID-19 infection epidemic period, but we did it using Web distribution.

In addition to the role of announcing the business activities of each department as a bottom-up as in the past, we aimed to be a place to share and discuss the direction of the hospital, such as hospital policy, ongoing business report, and new treatment.

From March 4th to 11th, 2021, as Renaissance Week, we gave lectures on “Operation of Cancer Center” and “Forefront of COVID-19 Infection” on the first day, and “Closed Nursing School” on the last day. And we distributed them on the Web conference system (Webex). General and designated abstracts were distributed on the hospital intranet (MyWeb) from the 4th to the 10th so that they could be viewed freely. The number of presentations was 46, and the total number of views was 2,378. Three awards for viewing, six awards for judges (including one for excellence and one for the highest award), and one special award were selected.

By holding this conference in COVID-19 infection epidemic period, we aimed to maintain the awareness of staff and departments to improve the quality of medical care even in difficult situations. Furthermore, we aimed to understand and share the efforts of each department and to become a valuable place and a source of cultural development for working together at this medical center. I want to continue in the future.

I want to nurture a new culture of hospitals in the age of With Corona.